

「ここらが潮時だ」――創業 100 年以上の老舗書店の店主は、そう言って店を閉じる苦渋の決断を下した。その書店は 1945 年の太平洋戦争末期に空襲で焼け落ちたこともあったが、戦後すぐに再建された。長年にわたり地域に親しまれてきたその街の書店も、いまや社会の変化の波にさらわれ、静かに姿を消そうとしている。この現象は日本各地で常態化しつつある。

日本出版文化産業振興財団によれば、2024 年 8 月時点で、日本の市区町村のうち 27.9%には書店が一軒もなく、47.7%は一軒以下しか存在しない。全国の書店数は 2003 年の 20,880 店から 2022 年には 11,495 店へと、ほぼ半減した。統計を持ち出すまでもなく、私たちの周囲にはその衰退の姿がはっきりと見て取れる。かつて商店街に並んでいた馴染みの小さな書店、駅前にあった中規模店、百貨店に入っていた大手チェーンの大型旗艦店――それらは一つまた一つと姿を消している。

【X】 書店衰退の要因は数多いが、最も大きいのはオンラインショッピングの台頭である。Amazon のようなネット通販は過去に例をみないほど便利であり、無料配送が当たり前になった今、わざわざ書店に足を運ぶ必要性を感じない人が増えるのも当然だ。特に近くに書店がない地域ではその傾向が強まっている。

しかし、この現象を単に「日本文化の危機」と呼ぶだけでは本質を見失うかもしれない。「書店は文化的な存在だから」公的に支援されるべきだという考えは、甘えであるという声さえある。結局のところ、急激な変化に適応できず苦しんでいるのは書店だけではない。ビデオレンタル店、CD ショップ、写真の現像サービス――かつて隆盛を誇った業種も、新しい技術に追いつけず姿を消した。小売業の一形態である書店も例外ではない。困難に直面したとき、それぞれが自らの道を模索するのは当然のことだ。この点で、適応力はすべての産業に共通する課題である。

実際、書店は何もせずに手をこまねているわけではない。むしろ、さまざまな新しい試みが始まっている。たとえば東京・吉祥寺の「BOOKS RUHE」は、独自の品ぞろえと温かい雰囲気で長年愛されてきた地域書店である。愛知県の「TOUTEN BOOKSTORE」では、厳選した書籍に加え、地元の素材を使ったコーヒーやハーブ・スパイス入りの焼き菓子を提供し、訪れる人の体験を豊かにしている。神奈川県横浜市の「STORY STORY YOKOHAMA」は、本だけでなく生活雑貨も販売する書店とカフェを融合させた空間で、頻繁にイベントも開催し、何度でも訪れたいくなる仕掛けを作っている。

こうした成功している書店にはいくつかの共通点が見られる。第一に、付加価値を提供していることだ。本とカフェや雑貨、イベントを組み合わせることで、単なる買い物以上の体験を提供している。こうした工夫によって、書店は単に本を買う場所ではなく、時間を過ごす場所にもなるのだ。

第二に、地域や特定の読者層に深く根ざしていることである。全国チェーンとは異なり、地域住民や特定の読者に合わせたサービスを展開することで、信頼を築き、リピーターを生む。街の雰囲気や店主の好みがそのままにじみ出て、温かみや親しみを感じさせる。

第三に、オンラインとリアルを組み合わせていることである。SNS や YouTube で日々の活動や書籍の紹介を発信し、遠方の読者ともつながる。同時に、オンラインストアや注文システムを運営し、全国からの注文を受け付けている。

【Y】 そして最後に、品ぞろえの独自性が成功のカギとなっている。どこにでもあるベストセラーを並べるのではなく、店主やスタッフの嗜好や哲学に基づいて選書する。そうすることで、「ここでもしか出会えない本」と出会う機会が生まれ、それが書店に足を運ぶ強い動機となる。

さらに近年では、「シェア書店」や「棚サブスクリプション」といった新しいビジネスモデルも登場している。前者は複数の個人や団体が一つの店舗を共有し、それぞれが自分で選んだ本を販売する形態である。後者は、月額料金を払って書店の棚を借りる仕組みだ。東京の「透明書店」などでは、この仕組みを通じて参加者同士の交流が生まれ、単なる商取引を超えた新たな価値が育まれている。

要するに、書店はいま大きな変革期にある。古いモデルを脱ぎ捨て、柔軟で創造的な取り組みを受け入れることで、生き残るためだけでなく、自らを再定義しようとしているのだ。こうした努力は単に商売を続けるためのものではなく、新しい時代に文化的生活を守り、形づくる試みでもある。

一見すると、書店の未来は暗いように思えるかもしれない。しかし歴史を振り返れば、書店は数々の危機を乗り越えてきた。戦火から復活した老舗のように、新しい挑戦と再生の波はすでに始まっている。これは単なる文化の危機ではなく、文化の再生の始まりとも言える。

結局のところ、書店の運命は私たちの手に委ねられている。スマートフォンをタップすれば本が届く時代にあっても、書店に足を運び、本を手に取り、思いがけない出会いをすること——その一つひとつが文化の未来を形づくる。書店の存続は、店主の努力だけでなく、私たち読者の関わりと選択にもかかっているのだ。

問 1

- (1) [X] 段落によると、日本における書店衰退の主な理由は何ですか。
- (2) [Y] 段落によると、成功している書店の共通点の一つは何ですか。

問 2

- (1) 日本出版文化産業振興財団は、日本の書店について何を報告していますか。
 - a. 現在、多くの書店は百貨店に入っている。
 - b. 自治体の 50% 以上に書店が存在しない。
 - c. 2003 年以降、書店数はほぼ半減した。
 - d. 書店数は長年安定している。
- (2) 一部の書店が現代の客にとって魅力的なのはなぜですか。
 - a. オンライン店舗より価格が安いから。
 - b. 公共図書館との提携があるから。
 - c. 国際的に仕入れた文学作品を重視しているから。
 - d. 何度も訪れたいくなる心地よい空間を提供しているから。
- (3) 個人経営の書店がリピーターを引きつけられる理由の一つは何ですか。
 - a. 政府から支援を受けているから。
 - b. チェーン店より安いから。
 - c. 珍しい海外の本を輸入しているから。
 - d. 地域住民に合わせたサービスを提供しているから。
- (4) 書店はソーシャルメディアをどのような目的で活用していますか。
 - a. 本を割引価格で販売するため。
 - b. 日々の活動を発信し、読者とつながるため。
 - c. オンライン小売業者を批判するため。
 - d. 国際的なブックフェアを企画するため。

(5) 棚サブスクリプションについて、本文に述べられていないのはどれですか。

- a. 顧客は月額料金で棚スペースを借りられる。
- b. 棚を借りる人は他の参加者と交流できる。
- c. ベストセラー小説の販売促進にしばしば利用される。
- d. この仕組みは、単なる商品の販売を超えた利益をもたらす。

(6) 本文によると、書店の最近の変革の取り組みの中で述べられていないものはどれですか。

- a. オンラインでの存在感を拡大するため、電子商取引プラットフォームと提携すること。
- b. 自らの役割を再定義するため、創造的かつ柔軟なビジネスモデルを採用すること。
- c. 時代遅れの仕組みを捨て、革新的な方法を取り入れること。
- d. 生き残りだけでなく文化生活を再構築することを目指すこと。

(7) 書店の未来についての筆者の語り口はどれですか。

- a. 完全に悲観的で、書店はいずれ消えるとみている。
- b. 困難を認めつつも、再生の可能性を見ているバランスの取れた姿勢。
- c. 単に統計を提示するだけで、評価は加えていない中立的な姿勢。
- d. ユーモラスで、皮肉を込めて書店閉店を描いている。

問3

近年、日本の書店は消費者の習慣の変化やオンライン購入の台頭によって、ますます大きな圧力にさらされている。多くの書店が閉店する一方で、適応の道を見いだすところもある。こうした店は単に本を売るだけにとどまらず、追加のサービスを取り入れ、個別化された体験を提供し、地域社会とのつながりを強めている。また、デジタルプラットフォームを活用して、より多くの顧客にリーチしている。シェア型スペースや棚貸しといった革新的なモデルも、有効な選択肢として登場している。これらの取り組みは、書店が今なお文化的生活に寄与する可能性を持っていることを示している。最終的にその未来を形づくるのは、経営戦略だけでなく、読者の関わりでもある。

石の影で

私の名前はハカナ。私はモアイ像の石彫職人の家に生まれた。この島では、一つひとつの石が記憶の重みを抱えている。歩けるようになった頃から、私は父や祖父が火山岩の大きな塊を先祖の像に刻んでいく姿を見て育った。彼らは寡黙で強い人々で、言葉よりも大地の声に耳を傾けた。石は命のないものではなく、眠っているだけであり、辛抱強く耳を澄ます者にのみ呼びかけるのだと彼らは信じていた。

私たちの家は北の採石場の近くにあり、海の匂いを運ぶ風と、丘に反響するノミの音が響いていた。私は幼いうちから、石を刻むことは単なる仕事ではなく、神聖な務めだと学んだ。十歳になるころには、金槌を握った手には豆ができ、耳は石のリズムに慣れていた。祖父はよく「お前は荒れる海の下を流れる静かな潮のようだ」と言った。私は一番大きくも勇敢でもなかったが、常に落ち着いて集中していた。周囲によく注意を払い、静かに人を観察して学んだ。そして石の中からも声を聞き始めた――耳ではなく、もっと深いところで。

しかし、十五歳のとき、何かがおかしくなり始めた。

ある朝、父と私はカヌーを作るための高いヤシを探して森に入った。だが、かつて木々が立ち並んでいた場所には一本も残っていなかった。

「これはよくない」父は静かに言った。「もうすぐ魚を獲れなくなるだろう。」

だが困るのはカヌーだけではなかった。モアイを運ぶにも丸木が必要だった。近くの森はすでに伐り尽くしており、今では島の奥深くへ進まねばならなかった。母は作物が育たないと嘆いた。風は強くなり、土は乾いてひび割れ、畑は年々収穫を減らしていった。

それでも酋長たちは像を求めた。

「もっと大きく作れ、もっと遠くから見えるようにせよ。」と彼らは言った。

そして私たちは、体が痛み、心が重くなっても彫り続け、石を運び続けた。

やがてある日、モアイが倒れているのが見つかった。それは私の師が彫ったものだった。夜の間に誰かが縄で引き倒したのだ。ある酋長は、敵対する氏族からの侮辱だと主張した。その後まもなく、別の像も倒れ、さらにまた別の像も倒れた。

「なぜだ？」祖父は悲嘆に暮れた。「先祖をこんなふうに扱うとは……考えられぬ。」

彼は拳を握りしめた。「モアイを倒すことは魂を倒すことだ。」

しかし像は倒れ続けた。私は見た。神聖な技が祈りではなく、争いと憎しみの象徴へとねじ曲げられていく姿を。

人々は食べ物をめぐって争い始めた。かつて共に踊り、宴を開いた者たちが、今では石を投げ、槍を研ぎ、密かに備えた。

そして――それは終わった。

モアイ作りは終焉を迎えた。

誰も石の声を聞かなくなった。

その代わりに人々は鳥人儀礼に目を向けた。海に面した断崖で、男たちは危険な競技に挑んだ。沖の小島モトゥ・ヌイまで泳ぎ、最初の卵を持ち帰った者がタンガタ・マヌ、鳥人となり、一年間の支配者となるのだ。

「先祖は倒れた。神はいま空におわす」と一人の司祭が言った。

人々は空に、卵に、波に祈り始めた。そして私たちはかつてないほど海を恐れるようになった。

突然、白い帆が地平線に現れた。世界の果てからやってきた、見たこともない巨大なカヌーだった。乗っていた異国の人々は見知らぬ言葉を話した。彼らは光る布、奇妙な金属、火を噴く武器を持っていた。

それが最初の出会いだった。

その後も彼らはやって来た。贈り物を持つ者もいれば、病を持ち込む者もいた。人々は高熱に苦しみ、倒れ、二度と立ち上がらなかった。

数年後、ペルーと呼ばれる地から来た人々が、我々の多くを連れ去った。千人以上が捕らえられ、指導者や司祭も含まれていた。戻った者はほとんどなく、戻った者も恐ろしい病を持ち帰った。

子どもが死に、長老が死に、歌は消えた。

そのころには私はもう石を彫っていなかった。大地はもはや語りかけず、風にため息をつくだけだった。

私の村は崩れ、畑は放棄された。モアイは雨と時に削られ、土にうつ伏したままだった。それでも、倒れた像の顔に怒りはなく、ただ静かな悲しみの中で佇んでいた。

「なぜこうなったのか？」祖父は死の前に私に問うた。「自分たちを救うことはできなかったのか」

私は答えられなかった。ただ空を見上げるだけだった。

今、私は老いた。この話を若者たちに語り、忘れさせぬようにしている。

私たちは森を伐り、土を枯らし、互いに争った。しかしそれがすべてではない。海の向こうから来た者たちが病と鎖をもたらし、我々の最後の力を奪ったのだ。

それでも——いくつかのモアイは今も立っている。わずかに残った像が海を見つめている。

それこそが私たちが生きた証であり、倒れぬようにと祈る言葉なのだ。

問1

- A. モアイの伝統が衰えるにつれて、鳥人儀礼が始まる。
- B. 外国人が到来し、病をもたらし、島民を連れ去る。
- C. ハカナの父が森が消えてしまったことに気づく。
- D. ハカナが彫るのを手伝ったモアイが倒れているのが見つかる。
- E. 年老いたハカナが残されたモアイを見つめ、若者たちに物語を語る。

問4

(1) ハカナの父は、森が失われたことが問題だと言ったのはなぜか。

- a. そのせいで風が強くなりすぎたから。
- b. 木がなければ漁の為の舟を作れなかったから。
- c. 儀式に使う鳥を追い払ってしまったから。
- d. 野生動物を村に近づけてしまったから。

(2) モアイ像が倒されたことは何を意味していたか。

- a. 芸術様式の変化。
- b. 自然による事故。
- c. 伝統の否定と争いの勃発。
- d. 新しい儀式における宗教的要請。

- (3) ハカナがモアイを彫るのをやめた理由は何か。
- a. 彼は続けるには年を取りすぎたから。
 - b. 彼の村には石を削る道具がなくなったから。
 - c. 石が彼に「語りかける」のをやめたから。
 - d. 司祭がその行為を禁じたから。
- (4) 物語における鳥人儀礼とは何か。
- a. 先祖を敬う平和的な儀式。
 - b. 忍耐力を基盤とした新しい支配者を決める競争。
 - c. 干ばつ時に雨を呼ぶ儀式。
 - d. 女性だけが行う舞踊。
- (5) 外国との接触はハカナの人々にどのような影響を与えたか。
- a. 社会の繁栄を助ける交易をもたらした。
 - b. より強固なモアイの制作につながった。
 - c. 病をもたらし、多くの人の命を奪った。
 - d. 島を脱出することを可能にした。
- (6) 物語の最後に出てくる、まだ立っているモアイ像について何が示唆されているか。
- a. 彼らは人々に見捨てられたことに怒っている。
 - b. 彼らは静かな悲しみをたたえながら島を見守り続けている。
 - c. 彼らは村人に復讐するつもりでいる。
 - d. 彼らはすべての意味と力を失った。
- (7) 物語は島の過去について何を示唆しているか。
- a. いつも平和で安定していた。
 - b. ただただ外国の侵略者によって滅ぼされた。
 - c. 内的、外的要因の両方によって崩壊に直面した。
 - d. 豊かな文化を持っていなかった。
- (8) 人々がモアイ作りをやめて鳥人儀礼を始めたのはなぜか。
- a. 島民たちは先祖の霊への信仰を失い、天空の神に頼ったから。
 - b. 外国人が彼らに宗教を宗教を変えるよう強いたから。
 - c. モアイが嵐ですべて破壊されたから。
 - d. 酋長たちが古い慣習を全面的に禁止したから。
- (9) 物語の最後で、年老いたハカナが表す感情は何か。
- a. 外国人への怒り。
 - b. モアイが再建されるという希望。
 - c. 自分たちの人々への憤り。
 - d. 悲しみと記憶を守ろうとする決意。

(10) 次のうち、物語について正しいものはどれか。

- a. 食糧不足が社会不安や氏族間の争いを引き起こした。
- b. 村人は島人儀礼のもとに団結し、争いを避けた。
- c. 外国人が島の共同体間に和平をもたらした。
- d. 農業の革新が社会の崩壊を防いだ。

3

A: すみません、ちょっといいですか？

B: もちろんです！どうされましたか？

A: ええと、ここに来るのは初めてで、何をすればいいのか全く分からないんです。

B: なるほど。新入会員向けのオリエンテーションには参加されましたか？

A: いいえ、していません。いつだったんですか？

B: 毎週月曜と金曜の午後6時にやっていますよ。

A: ああ、そんなのがあるとは知りませんでした。登録は必要ですか？

B: いいえ、そのまま来ていただいて大丈夫です。受付でインストラクターがお待ちしています。

A: よかった。じゃあ金曜日に必ず参加します。

B: ぜひ！ほかに何かありますか？

A: えっと、せっかく来たので、今夜受けられるクラスはありますか？

B: 今夜はエアロビクスのクラスが2つあります。初心者向けと上級者向けです。それから、15分後にボクササイズのクラスもあります。音楽に合わせてサンドバッグを打つエクササイズです。楽しめそうですか？

A: うーん……。グローブは必要ですか？

B: はい、でも用具カウンターでレンタルできます。気に入ったら自分用を買うこともできますよ。

A: 分かりました。やってみます。ただ、体調が万全ではないので、途中で休憩が必要になるかもしれません。

B: ご自身のペースで大丈夫ですよ。インストラクターはどんなレベルの方にも対応できるように訓練されています。休むときは、部屋の端の椅子に座るようにしてくださいね。そうしないと、サンドバッグが当たるかもしれませんから。

A: 分かりました！親切にどうもありがとうございます！

B: どういたしまして。更衣室はあちらの廊下を進んだところにあります。

A: ありがとうございます！